1．子どもの心とことばの育ち

子どもの発達支援を考えるSTの会
中　川　信　子

はじめに　言語聴覚士という仕事

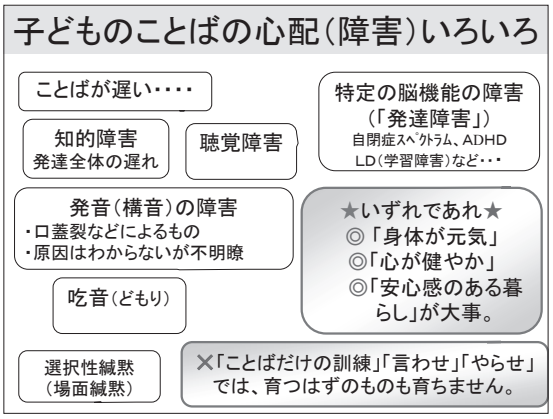
私たち言語聴覚士（ST）は、セラピストで、「治す」「改善する」を期待される職種です。でも「ことば」の障害の大半は高次脳機能の問題に由来するので、厳密な意味では治せません。私たちにできるのは、改善すること、発達を促すことです。

STはことばをspeech（音声言語）とlanguage（言語）に分けて考えることが多いのですが、STの対象になることばの障害の一覧をお示しします。

ことばの障害～～SpeechとLanguageに分けてみると

Language（言語）の問題		Speech(話しことば）の問題		
言語発達	言語機能			
1　難聴 2　中枢神経系の問題 ☆精神発達遅滞 ☆自閉症スペクトラム ☆LD　学習障害 ☆ADHD 注意欠如多動性障害 3　発達速度の問題 発達の個人差 4（脳性まひ）	失語症	発声の障害	構音－共鳴の障害	話しことばの流暢性の障害
		音声障害 （脳性まひ）	構音障害 口蓋裂	吃音

次に子どもに多いことばの心配をお示しします。



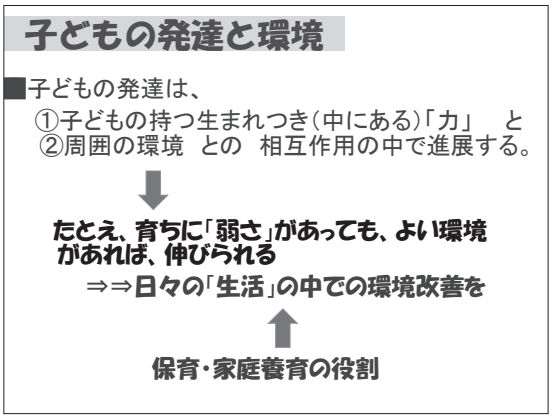
あらわれ方はいろいろですが、子どもの育ちとして「からだが元気」「心がすこやか」「安心感のある暮らし」が基本になるのは共通です。

1　子どもの「発達」

Development は velop（開く）に否定形の de がついたもので、「包みが開かれて中にあるものが出てくる」「なるべきものになる」という意味合いを持っているそうです。

「発達支援」とはその子らしく育つように応援すること , と言えるでしょう。

子どもの発達は、①子どもの持つ生まれつきの力　と　②周囲の環境　との相互作用の中で進みます。生まれながらの特性は変えられなくても、適切な環境があればよりよく伸びることができます。



「療育とは注意深く（ていねいに）配慮された子育てである」とは、故・高松鶴吉先生の有名なことばです。ことばやコミュニケーションの発達にとって望ましい環境や接し方について、「ていねいに配慮された子育て」について、日ごろ ST として保護者に

MEMO

お話しするような内容をお話しします。日常の診療の参考にしていただければ幸いです。

２ 「ことば」について

ことばには、３つのはたらきがあります。①思考の道具　②伝達の手段　③行動調整です。

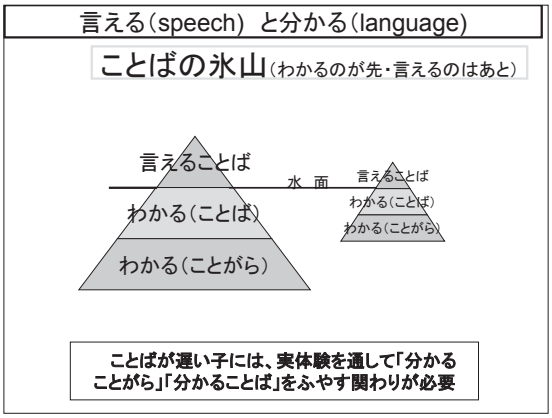
「ことば」 三つのはたらき

１　思考の道具
「カギがないなぁ。ああ、昨日、カバンに入れたんだった。」

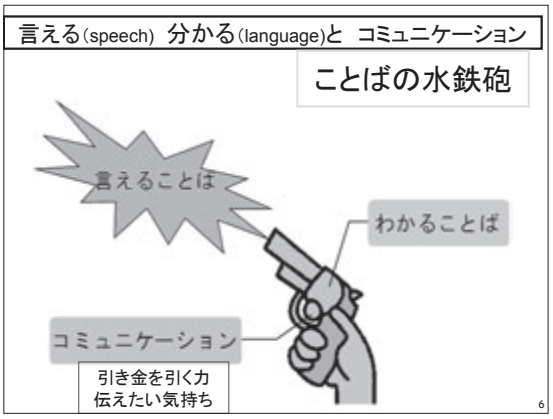
２ 伝達の手段
「玄関のカギ、見なかった？」

３ 行動調整の役割
「おいしそうなパン！　でも、まだお金を払ってないから、食べられない。」

また、日本語の「ことば」ということばには三つの内容が含まれています。
① speech　話しことば　音声言語
② language　言語知識（言語、概念）
③ communication　コミュニケーション意欲（伝えたい気持ち）
Speech と language の関係を氷山の絵で表わしました。



Speech と language そして communication の関係を水鉄砲にたとえました。

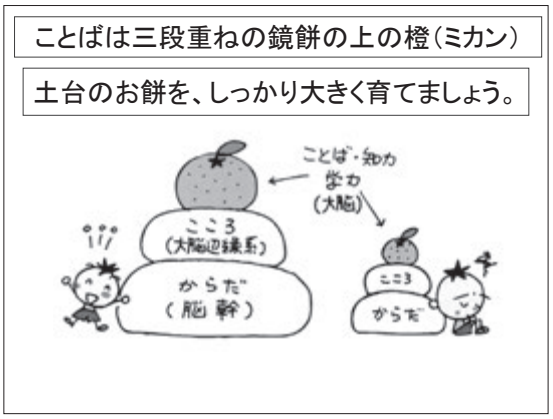


水鉄砲の口から出る水は音声言語 speech です。水鉄砲の口から水が出るにはタンクに水が入っている必要があります。これが language です。しかしタンクが満水でも、引き金を引かなければ水は出ません。引き金を引く力が「伝えたい」という気持ち、communication 意欲です。ST の役割の中で１番大切なことは communication 意欲をじょうずに育てることだとも言えます。

子どもの「ことば」をみる際には、どのくらい言えるかよりも、どのくらいわかっているか、伝えたい気持ちがどのくらい育っているか、に注目することが大切です。

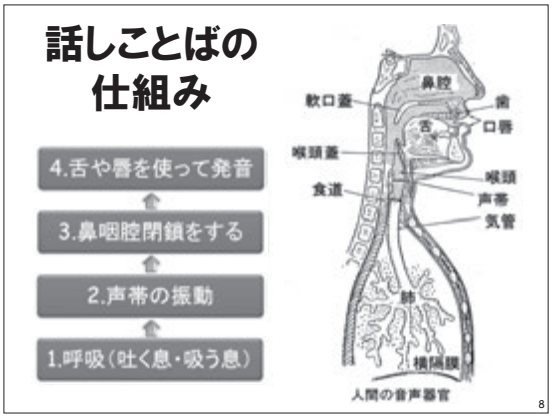
３　ことばのしくみと脳のはたらき　　「ことばのビル」

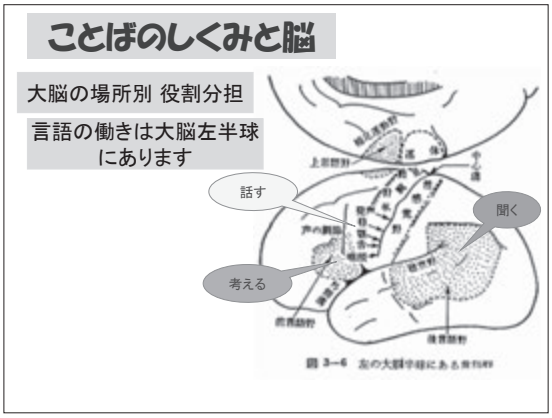
ことばは大脳の働きによって機能しますが、その前提として、体のはたらき、心のはたらきがあります。ことばを鏡餅の上に乗っている橙と考えると、大きい橙を乗せるには、１段目（身体のはたらき）と２段目のお餅（心のはたらき）をしっかり大きく育てなければなりません。

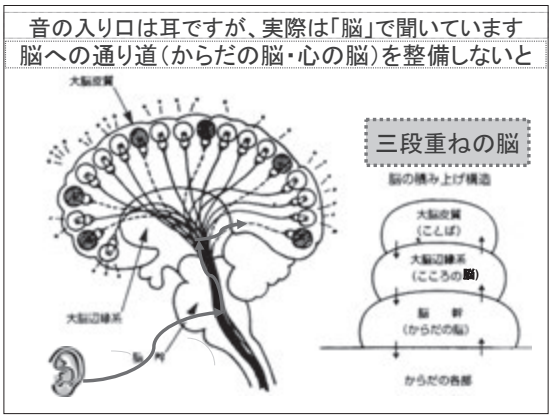


MEMO

話しことばのしくみと脳のはたらきを通して、このことを説明します。







話しことばは、呼吸をして、吐く息の力で声帯を震わせ、息が鼻に漏れないようにし（鼻咽腔閉鎖）、舌や唇を動かして産出されます。これらの動きをつかさどるのは、主として大脳左半球にある言語中枢です。

子ども達は、耳で聞いたことばを、記憶し学習して行きます。しかし、耳で聞こえた音は、大脳の聴覚野に届くまでに、脳幹と大脳辺縁系の「電線」を経由しなければなりません。つまり、ことばの力を育てるためには、体の働きをつかさどる脳（脳幹）と、心の働きをつかさどる脳（大脳辺縁系）の電線を、電気が通りやすい状態にしてあげないと、学習効果はあがりません。

「からだが元気」「心がすこやか」「安心できる環境」は、学習の基礎です。
これらを図にしたのが「ことばのビル」です。（図 1）

4　望ましいかかわり～～感覚統合を意識した遊び～～

三段重ねの鏡餅の下の段、「からだの脳」を育てるために「早寝早起き」は必須の条件と言いたいところですが、これを強調しすぎると、家庭養育をしている保護者にとってはプレッシャーになることもあるので、努力目標として伝えています。

比較的ハードルが低いのは体を使った遊びのすすめです。ただし、単に「からだを使って遊んであげましょうね」程度で、家庭での関わりが変容することは期待できないので、感覚統合の考え方を裏づけとして伝えるのが効果的です。

エアーズらによる感覚統合（sensory integration）の考え方は、理論的証明が万全でないと批判されることがありますが、現実に、子どもたちには大きな変化が生まれます。療育や保育の現場では広く取り入れられ始めており、最近たくさんの本が出されています。一般向けのものを 文末に 4 冊挙げました。

感覚統合をごく簡単に言うと、「脳に流れ込んでくる多種多様かつ大量の刺激を適切に交通整理し、必要な刺激だけを利用できるようにする調節作用」のことです。

脳を電球と電線で表わした図（「脳の中の切り替えスイッチ」）の中の脳幹の部分にはいわば「切り替えスイッチ」のようなものがあると考えてみましょう。下から流れ込んで来た刺激（情報）の中の必要なものはスイッチをいれて上に送り届け、不要なものはスイッチを切って無視するというはたらきです。これが適切に行われていれば問題ありませんが、ここがうまくいかないと、様々な不適切な行動がおきてしまいます。スイッチとは神経伝達物質が制御するしくみのことなので、直接働きかけることはできません。

MEMO

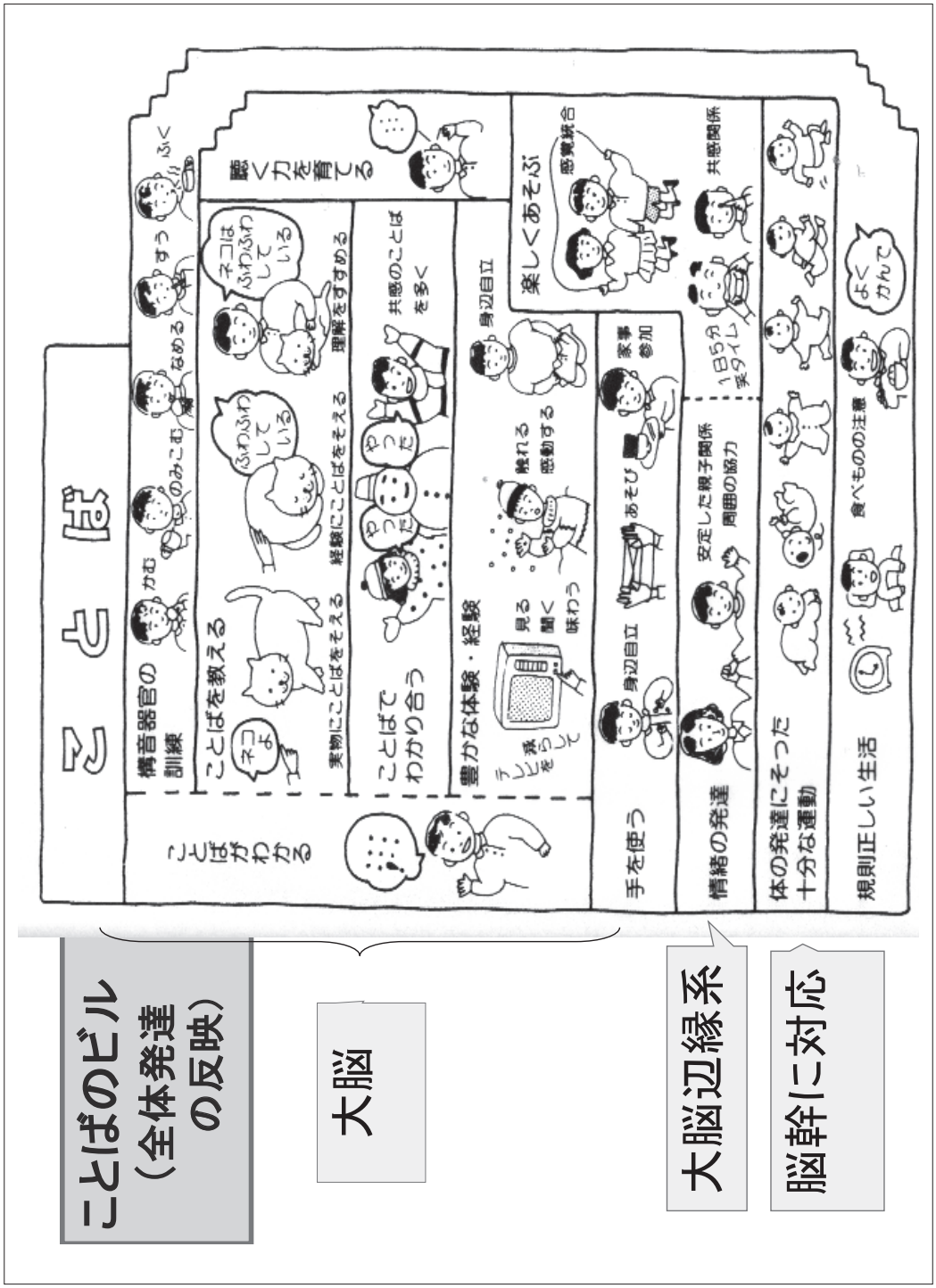
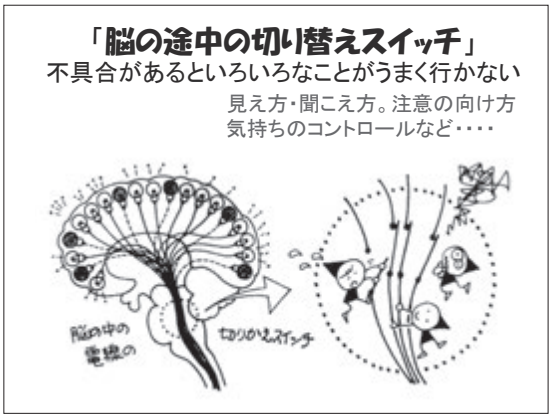

ことばのビル
（全体発達
の反映）
大脳
大脳辺縁系
脳幹に対応
ことば
構音器官の訓練
かむ
のみこむ
なめる
すう
ふく
ことばがわかる
ことばを教える
ネコよ
実物にことばをそえる
ふわふわしている
経験にことばをそえる
ネコはふわふわしている
理解をすすめる
ことばでわかり合う
やった
共感のことばを多く
豊かな体験・経験
テレビ番組をらいて
見る
聞く
味わう
触れる
感動する
身辺自立
聴く力を育てる
楽しくあそぶ
感覚統合
共感関係
手を使う
身辺自立
あそび
家事参加
情緒の発達
安定した親子関係
周囲の協力
1日5分笑タイム
体の発達にそった十分な運動
規則正しい生活
食べものの注意
よくかんで

図 1



でも、動きの悪いスイッチもたくさんの電気が下から流れてくれば、いやおうなしに動くようになりますから、いろいろな遊びや動きを通して改善が望まれます。

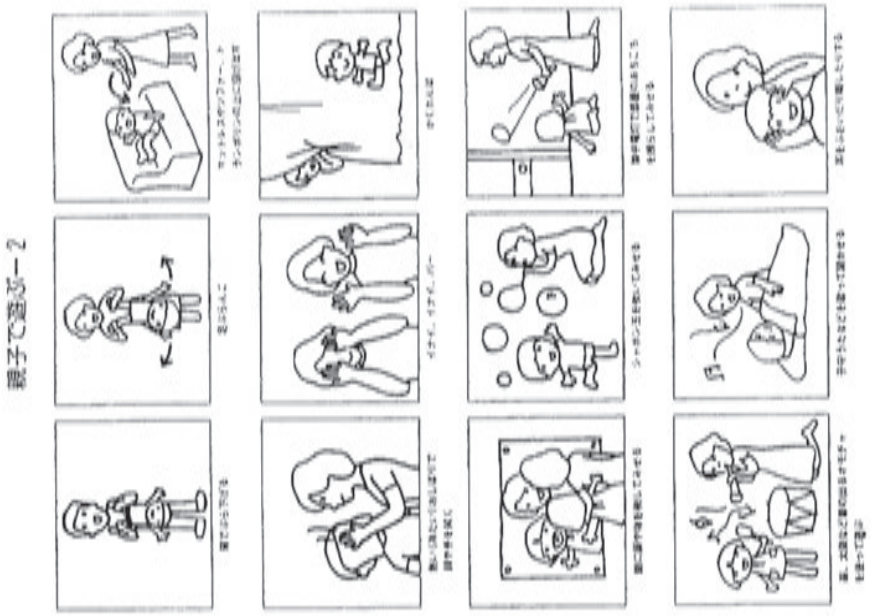
俗に五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）と言いますが、感覚統合の考え方では、五感のほかに「前庭覚」「固有受容覚」を重視します。発達障害の子どもたちの姿勢の崩れやすさ、不器用な動きなどはこの視点から見ると理解しやすくなります。

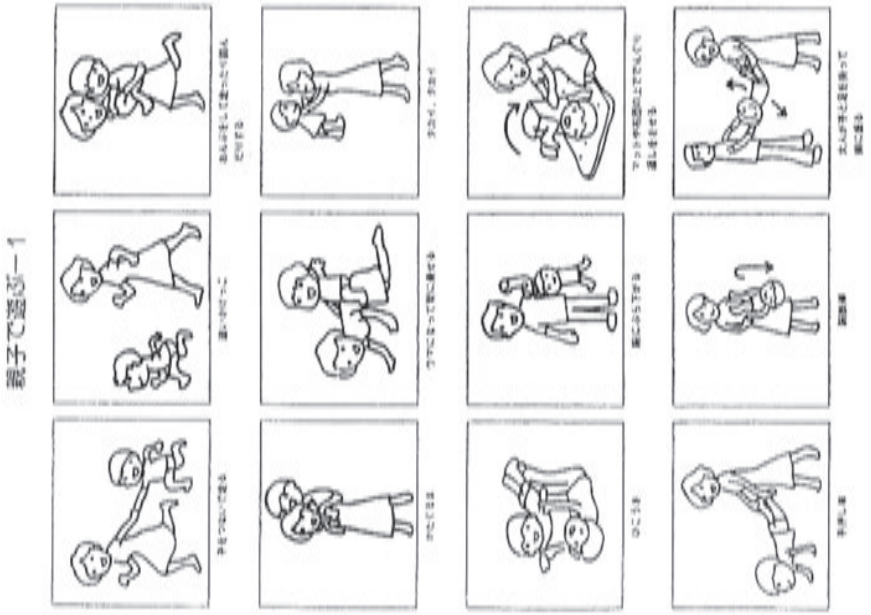
感覚統合を進めるのに有効な動きは、昔ながらの遊びの中に沢山含まれています。大きく分けると①揺れる（ブランコ、抱っこして揺らす）　②回転（抱っこして回る、いもむしごろごろ）　③加速度（すべり台、フロアカー遊び）　④上下動（トランポリン、高い高い）　⑤触覚入力（抱きしめる、マッサージ、水遊び）などがあります。

保護者に配るための「遊びのいろいろ」のプリントを参考のために添付しています。

感覚統合は「風が吹けば桶屋がもうかる」みたいな、突拍手もない話と受け取られることがまだ多いです。私は地元狛江市で月に１回作業療法士の先生を招いて私的な個別相談・指導の教室にかかわっており、毎日回転椅子でぐるぐる回るだけで姿勢が保てるようになったり、文字の読み書きがひどく苦手だったのがちゃんとノートをとれるようになったり、お子さん達の変化を目の当たりにしています。理論面での実証も今後の課題であるとしても、子どもさんたちが成長するのですから「これは良いものに違いない」と思っています。「白い猫でも黒い猫でもネズミを取るのは良い猫だ」というわけです。

MEMO





遊びのいろいろ

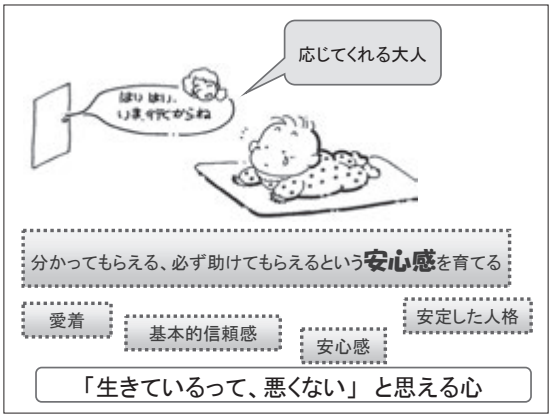
遊びのいろいろ

MEMO

5　望ましいかかわり Ⅰ ～心とことばの育ちを支えるために～～

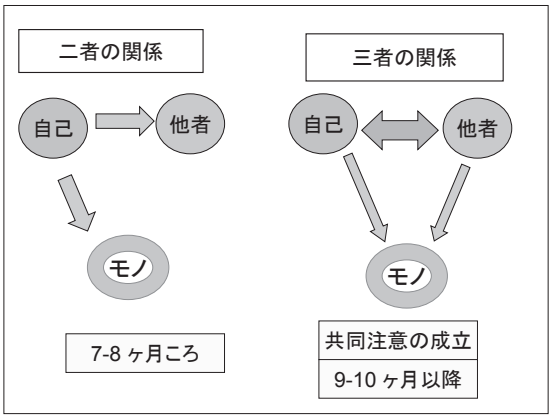
1）安心感

心の育ちにとって安心感、基本的信頼感が大切なことは言うまでもありません。乳幼児期から、助けを求めれば必ず応じてもらえる、助けてもらえる経験をつむことが、長じてからの安定した人格、レジリエンス（失敗しても再チャレンジする強さ）を作り上げるために大切だとわかってきました。



2）共同注意

安心感とかかわって、ことばの発達に関して大切な視点が共同注意（joint atttention）です。共同注意とは複数の人がひとつのものに注意を向けることです。



自分が興味をひかれ、注目しているものに、おとなも注目してくれていると確信できることは、子どもの中に「自分は見守られている」「大事にされている」という安心感を育てます。子どもの視線の先にあるものを一緒に見る。たったそれだけのことが、子

どもに幸せな人生をプレゼントすることにもなるのです。

視覚的共同注意が成立する前段階として、相手の視線を追う「視線の追従」や「視線方向の検出」の能力の育ちが必要です。この点で、スマホやタブレットの長時間依存には、問題があるのではないかと考えています。大規模調査で検証することはできないので残念ですが、子育ての現場を知る人たちの多くが感じていることではないでしょうか。

３）子どもとのじょうずな話し方

「子ども【に】ことばを教える」ではなく「子ども【と】ことばを交わす」考えたいものです。「子ども【と】気持ちを共有する」ことが、こころとことばの両方を育てることになるからです。

ことばの育ちうながすために用いられる「インリアルアプローチ」は、子どもとの接し方の基本としてSOULを提唱します。Silence（黙って） Observation（観察） Understanding（理解）Listening（よく聴く）の４つです。人との関係の基本は、相手の言い分をよく聞き、理解するところから始まります。

「インリアルアプローチ」は、また、子どものことばやコミュニケーションを育てる具体的方法として①子どもの動作をまねるミラリング　②子どもの出す声や音をまねるモニタリング　③子どもの気持ちや動作を大人が代わりに言うパラレルトーク　④おとなが自分の動作や気持ちを言うセルフトーク　などをあげています。

その他子どもと接する時に有効なことはいくつかあります。

○笑顔と明るい声

○子どもの名前は歌うように呼ぶ

○子どもの注意（興味）に大人が合わせてことばをかける

○「ダメ」の代わりに、願いを伝える（禁止は肯定的に行う）

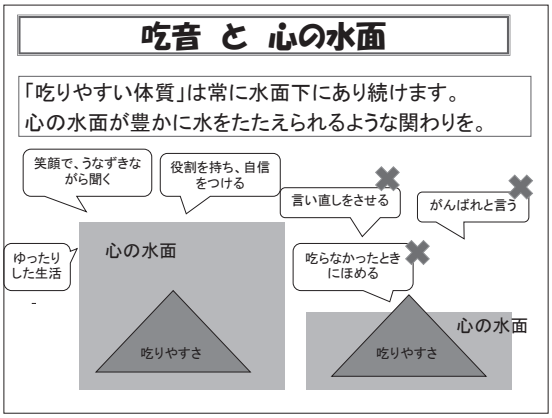
MEMO

○認めるかかわり、良いところ探し（ポジティブなことばかけ）
○避けたいことば
　脅かすことば 「～しないと～できないよ」
　ダメダメの連発
　一方的、高圧的な命令

６　ことばや発達が気になる子

ことばや発達が気になる子、育てにくい子がいます。すべてに発達障害がかかわるとは言い切れませんが、発達障害の可能性を視野に入れて望ましい接し方をすることは必要です。なぜならここまで述べてきた望ましい接し方は、すべての子どもにとって有効だからです。生活リズムの確立、体を使った遊びをしっかり行い、体が元気、心がすこやかであるようにし、「ことばのビル」を建て、「ふつうの暮らしをていねいに」ということ。今や失われる一方の「ふつうの暮らし」「十分な遊び」を子どもたちに保障するのは私達おとなの務めです。

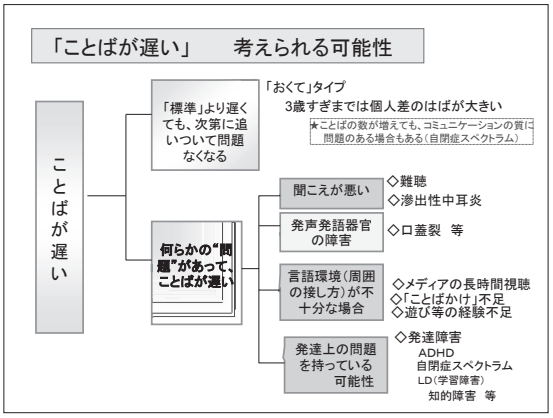
吃音について

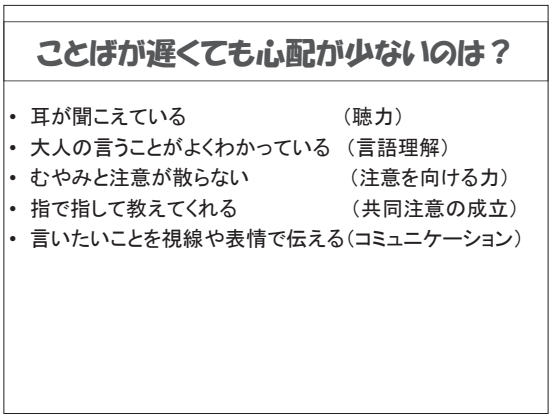


吃音をめぐる最新の考え方は「吃音は、子どものどもりやすい体質と周囲の環境とがかかわり合って、ことばの発達が活発な時期に生じる」というものです。
（NPO 法人全国言友会連絡協議会発行　幼児用リーフレット「うちの子はどもっているの？」より引用）
（このリーフレットは　言友会 HP　https://zengenren.jimdo.com/　→「出版物販売」→ 「吃音リーフレット（幼児編）」から無料ダウンロードできます。）

「ことばが遅い」どう見るか

1歳6カ月から3歳にかけての「ことばが遅い」という心配について





文献

「やさしくわかる言語聴覚障害」
小嶋知幸編著　ナツメ社　2016
「発達障害とことばの相談」
中川信子　小学館　2009
「1，2，3歳　ことばの遅い子」
中川信子　ぶどう社　1999
「子どもの心とことばの育ち」
中川信子　大月書店　2003
「感覚統合Q＆A　改訂第2版　子どもの理解と援助のために」
土田玲子監修　協同医書出版　2013

MEMO

「乳幼児期の感覚統合遊び　保育士と作業療法士のコラボレーション」
加藤寿宏監修　　クリエイツかもがわ　　2016
「育てにくい子にはわけがあるー感覚統合が教えてくれたもの」
木村順　　大月書店　　2006
「保育者が知っておきたい発達が気になる子の感覚統合」
木村順　　学研　　2014
「ことばが伸びるじょうずな子育て」（保護者配布用小冊子）
中川信子　　一般社団法人 日本家族計画協会　　2008
「わが子の発達に合わせた 語りかけ育児」
サリー・ウォード　　小学館　　2001
「吃音の世界」
菊池良和　　光文社新書　　2019
「うちの子はどもっているのかな？」（リーフレット）
全国言友会連絡協議会
「ことばの遅れのすべてがわかる本」
中川信子監修　　講談社　　2006

中川　信子先生　プロフィール

職種：言語聴覚士（ST：Speech-Language-Hearing Therapist）
子どもの発達支援を考えるSTの会　代表
サポート狛江　代表

略歴：
1971年　東京大学教育学部教育心理学科卒業
1973年　国立聴力言語障害センター付属聴能言語専門職員養成所卒業。

旭出学園教育研究所、神奈川県総合リハビリテーションセンター、東京逓信病院リハビリテーション室、調布市総合福祉センター、調布市保健センターなどを経て、現在は東京都狛江市健康推進課で就学前幼児のことばの相談にあたるほか、小中学校の特別支援教育巡回専門家チームにスーパーバイザーとして参加している。地域活動として、保健・福祉・教育の各分野にわたって、子どもの健やかな発達を応援する市民団体「サポート狛江」の代表を務める。
子どもの発達分野にかかわる言語聴覚士のネットワーク構築をめざす「子どもの発達支援を考えるSTの会」を2002年に設立し、代表を務めている。

個人ホームページ　　そらとも広場　http://www.soratomo.jp

主な著書　「健診とことばの相談」「ことばをはぐくむ」「1.2.3歳ことばの遅い子」（ぶどう社）
「子どものこころとことばの育ち」「ことばの不自由な子どもたち（監修）」（大月書店）
「発達障害とことばの相談」「はじめて出会う育児の百科（共同監修）」（小学館）
「生まれたときから ことばを育てる暮らし方」（保健同人社）
「子どもの発達に合わせたお母さんの語りかけ」（PHP研究所）
「発達障害の子を育てる親の気持ちと向き合う」（編著　金子書房）
「Q&Aで考える保護者支援」（学苑社）
など

MEMO